



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学
Hokkaido Information University



2025年
10月発行
通巻 第30号

FD・SDニューズレター

巻 頭 言

「変革の時代を生き抜く学び と成長の場として」

北海道情報大学・経営情報学部・通信教育部長
教授 越野 一博

1. 教育環境の急激な変化とその背景

大学における教育・学習環境は、近年かつてないほど急速に変化しています。かつて当たり前であった対面授業は、2019年以降の新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、突如として全面的なオンライン授業へと切り替えられました。多くの教育機関が学生との新たな「接続の形」を模索し、オンライン、そして対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド授業が試行されました。

その後、2022年末から急速に普及した生成AIの登場が、教育界に新たな地殻変動をもたらしました。大規模言語モデルを活用した対話型AIは、学生のレポート作成や情報収集手段として取り入れられ、同時に教員の授業設計や評価方法、学修支援の在り方にも大きな影響を及ぼしています。課題レポートや論述式試験の有効性が問われ、学生のオリジナリティや主体的な学びの姿勢をいかに育むかという問いが浮かび上がってきました。

2. 学びの意義と質

専門知識を得る手段は、時代と

ともに大きく様変わりしてきました。知識人との対話、書物、インターネット検索、そして現在では生成AIと、私たちが頼る情報源は多様化し、入手可能な情報量は飛躍的に増大しています。しかし、その情報の「質」や「真偽」が保証されているとは限らず、むしろ情報を使いこなすリテラシーがなければ、誤解や誤用を招く危険性が増しています。

論理的能力の面においても、生成AIの進歩は目覚ましく、2025年の国際数学オリンピックでは、出題された6問中5問をGoogleのGemini 2.5 Proが正答するなど、人間の能力に匹敵したかのような報道が度々為されます。このような報道に接した学生に「自分が学ぶこと」の意義を見出してもらうこと、学びの成果を活かす方法、他者と共有し、社会にどう還元するかという視点も、これからの学習の中心に据えられるべきでしょう。

生成AIを活用するには、単なる操作スキル以上に、「疑問を持つ力」「問いを立てる力」「深掘りする力」「真質を見極める力」が不可欠です。AIが提示する内容が本当に正しいのか、十分に深掘りされているのかを判断するためには、知識に加えて批判的思考力が求められます。AIの出力を鵜呑みにせず、適切に問い直し、意味を読み解く力をいかに育てるか。教育に携わる私たちには、そうした力を学生の中に育むことが、これ

目 次

- 1. 巻頭言…………… 1
- 2. カリキュラム・アドバイザリー
ボード会議開催報告…………… 3
- 3. FD・SDフォーラム
開催報告…………… 5
- 4. CDIOアジア・国際地域会議
2024 開催報告…………… 7
- 5. FD研修会実施報告 …… 9
- 6. 2024年度SD活動報告 …… 11
- 7. FD・SD関連行事および
活動実績…………… 12
- 8. あとがき…………… 12

発行：北海道情報大学

まで以上に求められています。

3. 本学における生成AIの教育利用

本学においても、2025年度後期より、通信教育部の複数の科目で生成AIを活用した学習支援システムの導入が始まります。学生一人ひとりの理解度や学習スタイルに応じた最適化された学習支援を提供することで、学びの個別化・柔軟化が一層促進することが期待されます。

一方で、AIに任せきりではなく、時代のニーズに合った学習内容の設計、学生が卒業後に直面する課題に備えた継続的な改善が不可欠です。AIはあくまでツールであり、それを活用する人間側の意思と知性、そして教育理念こそが、最終的な学びの質を左右します。

4. 倫理的な責任と人間の役割

AIを教育に活用する際、倫理的な視点は決して欠かすことはできません。国際的には、AI利用にあたって考慮すべき倫理原則として、「人間の尊厳、安全性、持続可能性」「解釈可能性、説明責任」「幸福とウェルビーイングの促進、社会的連帯、民主的参加、公正性」「多様性、プライバシー、セキュリティ」など、さまざまな概念が挙げられています。AIは過去のデータに基づいて尤もらしい答えを提示できますが、そこには歴史的な文脈や人間の感情、価値観といったものが公平に織り込まれている保証はありません。AIの判断が誤りや偏見を含む可能性は常に存在します。だからこそ、それを監視し、軌道修正する存在としての人間の役割が重要です。

私たち教育機関が目指すべきは、AIの能力を引き出すスキルだけでなく、「AIのガードレール」

としての役割を果たせる人間を育てることです。AIが提示する情報を鵜呑みにせず、自らの倫理観と社会的責任をもって再考し、必要に応じて立ち止まり、問い直すことのできる人材の育成です。こうした人間的な判断力や責任感、技術の進化がどれほど進んでも、教育が育てるべき中核であり続けると考えます。

5. 格差の問題と大学の使命

生成AIをめぐる議論の中で、アクセスの格差という問題も無視できません。高性能なAIツールの多くは有償であり、それにアクセスできるか否かが、学びの質や深さを左右する場面が増えてきました。こうした「AIアクセスの格差」は、経済的格差を背景とし、結果として知的資源へのアクセスにおける不均衡を助長しかねません。結果として、経済的格差が知的格差に転じ、それが経済的格差を再生産するという負のスパイラルに陥る危険性があります。こうした課題に対し、高等教育機関は、すべての学修者に対して公正な学習機会と環境を整える責任があると考えます。

6. FD・SDの新たな意味とHIU Vision 2030

本学が掲げる「HIU Vision 2030」では、次のように明記されています。

近年、生成AIの出現は情報技術の進化をかつてないほど加速させ、経済、文化、生活様式など社会のあらゆる領域に根源的な変革をもたらしています。私たちはまさに社会構造そのものが大きく転換する変革期に立っています。あらゆる産業・社会分野でDX（デジタルトランスフォーメーション：デジタルの活用による変革）が急

速に進展する現代において、本学の役割は重要です。本学は「情報の総合大学」としての特色を最大限に発揮し、最先端の情報通信技術や人工知能に関する深い知識と実践的なスキルを習得できる教育を通じて、未来社会を支え、創造する人材を育成することが使命です。

このビジョンを実現するには、教育を担う教員だけでなく、学習環境を支える職員も含めた「大学人」全体の不断の学びと連携が不可欠です。FD・SDは、教育・研究・支援という役割を越えて、「よりよく学ぶとは何か」「この時代にふさわしい学びとは何か」を、教職員全体で問い直し、共有するプロセスです。そこには、知識だけでなく、価値観の更新や、未来への責任が含まれています。

7. 結びにかえて：学び続ける大学人として

時代が大きく転換する今こそ、私たち大学人が「学び続ける姿勢」を体現することが求められています。学生たちは、私たちの問いの深さ、変化への柔軟性、他者との協働の姿勢をよく見えています。AIを受け入れつつも、人間としての倫理、責任、創造性を手放さない——そのような姿勢を、まず私たち自身が学生に示すことが、これからの教育の基盤となるはずです。

FD・SDを通じて、私たちは「教える人」「支える人」とあると同時に、「ともに学ぶ人」であり続けたいと思います。ともに学び、ともに未来を築く大学が求められていると考えます。

カリキュラム・アドバイザーボード会議 開催報告

医療情報学部 医療情報学科 講師 服部 裕樹

1. はじめに

2025年1月30日にカリキュラムアドバイザーボード会議が開催され、2024年度の新カリキュラムについて各学科等の取り組みについての報告があり、それぞれの報告に対して学外アドバイザーからコメントを頂戴し、質疑応答、本学教職員との意見交換が行われました。本稿ではこの様子について報告いたします。

2. カリキュラム・アドバイザーボード会議について

この会議は、学内会場とZoomを用いた遠隔オンラインとのハイブリッド形式で行われ本学の教職員88名、下記に挙げるアドバイザー7名にご参加いただきました。

表1 2024年度アドバイザー（敬称略）

氏名	所属・役職
龍田 昌樹	江別商工会議所 副会頭
	株式会社龍田工務店 代表取締役
高井 昌彰	北海道大学 情報基盤センター 教授
大石 憲且	株式会社ネクステック 代表取締役社長
中村 博彦	中村記念病院 理事長・院長
福田 崇之	金沢工業大学 産学連携局 次長
志知 芳彦	札幌大学 地域共創学群 総合教育学系 教授
嘉賀 雄一	ドリーム・オンライン株式会社 代表取締役

3. 各学科、部署からの報告

先端経営学科

先端経営学科では、2017年度に大幅なカリキュラム改正を、2021年度および2024年度には小規模な改正を実施している。2017年度カリキュラムで学んだ学生の卒業生学修成果アンケートからは、自己評価がやや上昇している傾向が見られた。2021年度および2024年度の改正後に入学した学生の卒業は、本年度以降となる。就職実績については、直近3年間で未内定者が2名のみという高い水準を維持しており、製造業を含む多様な分野に就職している。

システム情報学科

旧カリキュラムの総括として、ディプロマ・ポリシーを満たすカリキュラムを設定し、個々のレベルに応じた知識・技術の習得が可能な講義を実施している。また、一部科目では習熟度別授業を中止したが、卒業率や単位修得率は上昇している。ICT活用としては、POLITEや貸与PCを効果的に活用してい

る。2024年度からは、ディプロマ・ポリシーに対応する講義として「データサイエンス入門」を新設し、ビギナーズセミナーもAIや論理的思考、課題解決を含む内容に改める。

医療情報学科

法令改正や業界の多様化に対応するため、医療情報学科では2023年度から新カリキュラムを設定した。体験型学修や上級生によるコーチングに加え、AI関連や基本情報技術者対応の科目を導入する。ICT活用としては、オンライン講義やオンデマンド教材、POLITE、VRゴーグルによる仮想臨床実習を実施している。

情報メディア学科

対面授業を基本としつつ、ICT活用は科目担当に委ねているが、全科目共通でPOLITEを活用し、資料配布や課題提出を行っている。「情報メディア入門」や「情報メディア学」では、対面とオンデマンドのハイブリッド形式を採用している。2008年からはPBLを重視したプロジェクト型カリキュラムを展開し、テクノロジーとデザインの融合を図っている。今後はテクノロジー・デザイン・アートを組み合わせた共創の推進や、アート思考、CDIO、デザイン思考などの教育フレームワーク導入も検討している。

教養教育

本学の使命およびディプロマ・ポリシーにおいて、教養教育が果たす役割と育成する能力について改めて確認した。2024年度カリキュラムでは、多くの教養教育科目で新設や科目名の変更を行っている。一方、各学科のカリキュラムにおける教養教育の卒業必要単位数は減少しており、専門教育とのバランスについて検討を進めている。アメリカの高校で導入されているAP（Advanced Placement）システムを紹介し、本学では高大連携や通信教育部が既に一部対応していることも報告した。

教職課程

教職課程では、昨年度に引き続き自己点検評価を実施している。一般社団法人全国私立大学教職課程協会からは、カリキュラム・アドバイザーボード会議が有効に機能しており、さまざまなエビデンスに基づき実施され、前年度の指摘に対する改善も図られているとの評価を受けた。一方で、通学部・通信教育部それぞれの教学特性を考慮した自己点検・評価がなされれば、より一層充実するとの助言も得た。教職カルテや学生アンケートの可視化、履修確認シート、教育現場での体験を通じて、昨年の助言に対する取り組みを進め、その結果を報告した。

4. アドバイザーからのコメント、質疑応答

龍田様

従業員確保の観点から女性の採用が重視されており、大学から輩出される女性の数を増やしてほしいとの助言をいただいた。先端経営学科の発表に対しては、経営系科目を軸に据えつつ、ICT活用力を高める内容への更新が重要であり、科目数の再編よりも内容の見直しが望ましいとの指摘があった。あわせて、基本情報技術者試験の推奨は意義があり、学外での実践や社会課題への挑戦を通じてポートフォリオを形成することが、今後の人材育成の鍵になるとの回答をいただいた。

高井様

システム情報学科のカリキュラムは、理論と実践のバランスが取れ、基礎から応用まで網羅されているとの評価を得た。今後は量子技術やパターン認識、GPU処理など先端分野の強化が期待される。卒業論文では、学生の主体性を尊重しつつ、適切な指導と環境づくりが重要とされた。企業連携には、相互に利益のあるインターンや共同開発が有効で、カリキュラムはコアを保ちつつ柔軟な設計が望まれる。グローバル視点は、制度よりも地域課題と結びつく実践重視の取り組みが有効とされた。

教職課程については、魅力向上に向けて、他学科との連携や地域・学校現場との協働を通じ、社会的スキルとしての教育の価値を広く学生に伝える取り組みが重要であると回答された。

大石様

システム情報学科の業界動向への追随は評価される一方、教育機関が最新技術に即応するのは難しく、基礎的・普遍的なスキル習得が重要との指摘を受けた。特にクラウドやコンピュータサイエンスの理解、対話力・チームワーク力が求められ、哲学や離散数学も有効とされた。実務ではインターネットや仮想化の知識、知財やAIリスク対応も必須とコメントがあった。さらに、チームワーク論・リーダーシップ論を方法論として学ぶ必要性が強調された。企業連携には実務的フィードバックを含む評価制度が有効で、インターンやイベント参加を柔軟に認めるカリキュラムが望ましいとの助言をいただいた。

中村様

医療系のDXは依然として遅れており、カルテ情報の共有にも高いコストがかかるのが現状である。そのため、医療情報学科の学生が病院で活躍するためには、医療に関わるシステムを扱える医療情報技師の資格や、大量のデータを解析・活用する統計学的知識を、大学在学中に習得すべきとの回答をいただいた。

福田様

テクノロジー・デザイン・アートの共創は時代に即した取り組みであり意義は大きいですが、日本の現状では広く共感を得にくく、アートの位置づけや意義を明確にすることが重要との回答をいただいた。また、社会との接点を持ち挑戦とフィードバックを得ることで、学生は価値を生み出す人材に成長できるとされ、アートの導入も創造と行動変容を促す上で有効と評価されているとの回答をいただいた。CDIOのフレームワークはプロジェクト系科目と親和性が高く、特にO（Operate）を実践する場の設計と企業等との連携が重要であり、高校生や保護者にはフレームワーク自体よりも、成長した学生の姿を通じて魅力が伝わるとのコメントをいただいた。

志知様

教養教育では批判的思考や創造性を育む意義を明確にし、情報科目とのバランスを工夫することで質の高い学びが可能と回答された。AP制度類似の導入は有効であり、特に通信教育の強みを活かしたCredit by Examの活用を提案された。国際情報プログラムはDXやICTに強みを持ち、他大学との差別化が可能であり、広報や教職員全体での理解・連携が成功の鍵とコメントをいただいた。

教職課程の自己点検評価では、可視化による成果が見られ、教職員間の協働や学生支援体制も着実に強化されていると回答された。学生確保には広報やガイダンスの工夫が重要であり、育成面では探究力・指導力・ICT活用力など実践的スキルが求められおり、教育課程の柔軟な見直しや外部との連携、通信教育の課題対応も含め、今後も継続的な改善が期待されるとコメントをいただいた。

嘉賀様

高校で情報科を担当し、ICT支援員としての立場から、小中高の現状についてご説明いただいた。国際情報プログラムについては、「情報」という名称の意義を明確にし、「国際」の部分は学生の関心から導く形が望ましいとのコメントをいただいた。教職課程の可視化は、学生にとって分かりやすく、現代に合った非常に良い取り組みであるとの評価いただいた。

最後に渡部重十副学長からの閉会挨拶をもって2024年度カリキュラム・アドバイザーリーボード会議は終了いたしました。

FD・SDフォーラム開催報告

情報メディア学部 情報メディア学科
准教授 坂本 牧葉

1. はじめに

令和7年3月6日に教員の教育力向上、授業内容及び方法の改善を目的としたFD・SDフォーラム（講演）を本学松尾記念講堂において対面形式で開催した。テーマは「先端半導体とAIにより広がる将来の可能性」であった。第一部では、アントレプレナーシップセンター運営委員から視察報告がされた。第二部では、北海道大学副理事 情報科学研究院 特任教授 村山明宏氏が「先端半導体が牽引する北海道の情報科学技術～展望と課題～」と題して講演された。本稿ではこの様子について報告する。

2. 第一部：アントレプレナーシップセンターからの視察報告

アントレプレナーシップセンターからの講演概要は以下の通りです。

【講演概要】

吉見准教授からアントレプレナーシップセンターの紹介と金沢工業大学への視察報告がされた。まず、アントレプレナーシップセンターの概要が紹介され、本学は北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク（HSFC）の共同機関であるなどの視察の背景が説明された。本学でも他研究者とのマッチングや共同研究を促進し、教育力向上に直結する実践的な研究活動を進めたい。

視察先の金沢工業大学は6学部17学科であり、本学の3倍程度の規模である。就職率も99.9%と高く、分野も本学と類似する。下記は視察概要を示す。

- ・視察先：金沢工業大学 扇が丘キャンパス（メインキャンパス）
- ・出張日程：令和6年12月2日～12月4日
- ・視察参加者：近澤講師、吉見准教授、八重原職員、高橋職員（4名）

視察については、下記の3点について報告された。

(1) 研究シーズの活用に関する取り組みは？

教員と職員が隔てなく取り組む。プロジェクトや共同研究を積極的に誘致し、学生・研究者の活動フィールドを拡大している。文科省などの補助金獲得に向けて、専門部署が情報収集のみならず、教員に対して積極的に情報収集・支援・他研究者とのマッチングを図っている。

(2) ファブリケーション施設の活用方法は？

ファブリケーション施設「夢工房」は技師、学生スタッフが在籍している。道具の貸し出しや部品の購入ができるなど利便性に優れ、プロジェクトメンバーの募集掲示なども可能である。使用にあたって、ライセンス講習は受講必須であるが、授業課題など課外の時間も多く使用されている。

(3) アントレ教育をはじめとする学生主体の活動支援や環境に関する知見の収集

社会との連携活動の中に教育（学生）を含めている。地域課題に取り組むために、メインキャンパス以外の白山麓キャンパスを地域課題解決のためのハブとして活用している。法人直轄の組織体（産学連携局・教育支援機構）を設けることによって学外予算獲得や業務提案をしやすくしている。



講演の様子（第一部）

本学教員に対しても施設活用を題材としたワークショップや研修を通じて、授業改善に結びつく実践的な教育方法の習得を促す。

第一部では続いて、小田島職員がフィンランドで視察中の安田教授、サイモン教授とオンライン中継を繋ぎ、オウル応用科学大学への訪問の様子を紹介した。オウル応用科学大学はメディア、アート、ビジネス、ソーシャルケア、環境資源、機械工学などの分野を学ぶことができる。本学にも視察団体が訪れたことがあり、これまでも安田教授を中心に交流がある。本学学生も数名、留学している。

国際情報プログラムでのアンプレ留学プログラムの開発であり、有意義な話し合いが進んだことが報告された。また、今後もテクノロジーアートの分野を通じて連携を図っている取り組みも報告された。これらの国際交流は、教員にとっても授業方法の改善や教育手法の多様化につながる研修・研究機会となっており、テクノロジーアートの分野を通じた連携においても教育力向上が期待されている。



講演の様子（第一部）

3. 第二部：講演

北海道大学副理事 情報科学研究院 特任教授 村山明宏氏が講演し、主に下記の3点についてお話しいただいた。

- (1) 我が国において先端半導体の果たす役割と情報

科学技術分野への貢献の可能性

(2) 半導体を生かすための人材育成に関する課題

(3) 北海道大学が進めている取り組み

半導体は日用品に使われており、交通機関、諸手続き、送電などあらゆるインフラを支えている。

さまざま半導体が協力（集積化）して、他の電子部品やソフトウェアと連動することによって、さまざまな機能を実装することができる。近年は、最先端の半導体は3DCGなどの素早い画像処理などで応用されている。

「先端半導体とAIの融合」は今後の技術発展のキーワードであると紹介された。例えばリアルな仮想空間の実現、気象予報、薬・ワクチン開発など、計算処理の高い半導体によって開発実現が可能となると考えられる。

我が国における半導体製造では、九州で先行している。多くの大手半導体企業が進出し、TSMCの熊本進出も記憶に新しい。熊本大学では、地域の半導体および関連企業への良好な就職状況を作り出し、産学連携体制の構築による人材育成に取り組んでいる。

九州大学もまた、TSMCと包括連携を調印し、インターンシップやワークショップなどの実施している。



講演の様子（第二部）

北海道大学でもカリキュラムを増強し、半導体産業に関わる人材育成に力を入れている。

例えば、半導体の専門教育とAI/DXの先端知識の学びを提供し、AI/DXの基礎がわかる半導体専門家を育成する。一方、AI/DXの専門教育と半導体技術や回路の知識によって、半導体技術がわかるAI/DXの専門家も育成する。2023年文科省「大学・高専昨日強化支援事業」初年度ハイレベル枠に採択され、2024年度は定員増を実施中である。

北海道大学 量子集積エレクトロニクス研究センターでは、「社会実装ユニット」、「高性能化ユニット」、「省電力化ユニット」で研究分野や要素技術に連携させた社会実装に繋げる関係を構築するための研究が取り組まれている。

今後の展望では、先端半導体とデジタル技術を組み合わせ、問題解決や価値創造を図る人材が求められると述べられた。具体的には、ユーザの視点で先端半導体を活用する情報システム/ネットワーク

を創出したり、付加価値の高く環境への負担が少ないクリーンな製造技術や原材料の研究開発を担ったりする人材である。こうした最先端分野に対応できる人材を育成するためには、教員自身が教育力を高め、大学等の授業内容や方法を改善していくことが不可欠である。そのため、先端半導体技術やデジタル技術を題材とした研修や研究を通じて、教員が最新の知見を教育に取り込み、学生の学びに直結させる取り組みを図る。

今後、先端半導体によって解決可能な社会課題の例として、高度医療への経済的なアクセス、健康寿命の増進と自立支援型の介護、雇用の創出などが挙げられた。いずれも人間視点で社会を豊かにするための提案が可能なのではないかと述べられた。そのため、潜在的な人材の獲得が求められている。特に女子学生が少ない分野であるため、理工系を目指す女性へのアピールポイントを生み出す必要がある。

【質疑応答】

Q：「大学の半導体ビジョンは若者に夢を語れるか」という問いはまさにその通り。特に大学生にアピールする場合は、その学生が社会に出る2-3年後の状況を語れるといいのだが、どのように「夢」を語ることができるか？

A：具体的に語ることは難しい。学生との年代による価値観の違いに注意する必要がある。

「世界最先端技術を学んで、自身の人生の糧に生きることができる」ということは、若者が価値を感じるかはわからない。声かけする側の年代とは異なる価値観を持っていると認識することがまず重要である。企業で働くことを説明する場合は、なるべく具体的な勤務内容の説明が求められる。具体的に体験して知ってもらう機会が必要ではないかと認識している。

Q：ハードとソフトを繋ぐ学びをする必要があると思うが現在はどうのように教育が取り組まれているか？

A：半導体に関わるソフト面とハード面の研究分野は分かれてしまっており、今後の課題だと言える。実際の企業から教員を派遣してもらうなどの取り組みを考えている。

Q：半導体産業に関わることの職種・業種の魅力は？

A：最先端の技術開発に取り組んでいるということ。台湾では特に社会的なステイタスという風潮がある。成長性が高い分野ということはいまよく発信したい。

質疑応答の後、西平学長から挨拶をもらい、閉会した。

CDIOアジア・国際地域会議2024 開催報告

情報メディア学部 情報メディア学科
教授 隼田 尚彦
経営情報学部 システム情報学科
教授 サイモン ソーラ
経営情報学部 先端経営学科
教授 福沢 康弘

1. はじめに

第11回CDIOアジア地域会議（ARM）が、2024年9月5日から7日の3日間、本学で開催されました。

CDIOイニシアティブは、工学教育の変革を目指す国際的な教育フレームワークです。このフレームワークは、「構想（Conceive）」「設計（Design）」「実装（Implement）」「運用（Operate）」に着目し、学生の能力を育成することに焦点を当てています。このアプローチは、実践的かつ統合的な学習を通じて、卒業生が複雑な現実世界の問題に対応できる能力を身につけることを目的としています。

本学は、情報の総合大学であり、伝統的な工学大学ではありませんが、このフレームワークが本学の教育にも有効であると考え、2018年3月にCDIOイニシアティブに加盟しました。これまでも何人もの教員が、CDIOの国際会議やアジア地域会議に参加してきました。そして、ついにCDIO ARMのホスト校となったのです。我々は、この会議のテーマを「高等教育におけるデジタルイノベーション - 学生を成功に導く」と設定しました。35の大学・機関、13の国・地域から約90名の国際的な参加者が集まり、堅実な参加者数となりました。参加者数は当初の期待をわずかに下回ったものの、参加者の熱意がその不足を十分に補っていたと思います。

2. 会議の準備

本学教職員が一丸となって、準備に取り掛かりました。国際会議の準備には、かなり多くの作業が伴いました。CDIOのWebサイトや国際会議での広報活動に加え、近隣大学や道内高専などへの案内送付、広報や参加申込に使用する専用Webサイトの準備を先行して行いました。会場準備や案内等の準備、ア

ジア各国の宗教文化に配慮した食事の手配、祈祷室の準備、モバイルデバイスに最適化したデジタルハンズアウト・ポスター・学内サインのデザインや講堂に設置するCDIO2024の文字の制作、会議パックの準備と広範に渡りましたが、多くの教職員の皆様の働きと学生の手助けを得て、なんとか間に合わせることができました。

準備に参加した学生には、CDIOのプロセスをこの準備の中で体験学修してもらおうと考えました。準備段階での学生の参与は、専用Webサイトのデザインとコーディング（斎藤一教授の指導）、ハンズアウト・ポスター・学内案内サインのデザイン、会議パックに含まれていたアイヌ紋様をモチーフとしたコースターデザインとその制作（隼田指導）のほか、ハラル料理の準備など多岐に渡りました。CDIO2024の文字制作に関しては、予期せぬ事態にも陥りましたが、事務職員有志の皆様の支援も得て、なんとか当日までに間に合わせることができました。また、当日の記録映像を撮影する学生映像班（島田教授指導）は、事前に当日の作業の流れを知るために、体育祭で本番を想定した記録映像撮影と編集の体験もしました。このような入念な準備があったからこそ、会議を成功裡に終わらせることができたと思います。

3. 会議の概要

本会議では、現代の教育と技術の最前線を深く掘り下げる、質の高い基調講演と特別講演が複数行われました。初日にはヘレン・レオン氏が「教育と学習の再考：反転学習と学習分析のケーススタディ」と題して講演し、教育方法論の革新とデータ駆動型アプローチの重要性を提示しました。これに続き、二日目にはロバート・ソング氏が「工学の未来におけるAIのパラドックス」について講演しました。

三木将貴氏の「高高度気球（上空20km）」に関する魅力的な特別講演は、そのユニークな実践で聴衆を魅了し、西原明希氏による「境界を越える：グローバルエンゲージメントを通じた学生の成長とエンパワメント」も好評を博しました。

パラレルセッションでは、「CDIO 101 - 初心者向けCDIO」（英語編：RMUTT ナタ・クプタスティエン氏とウラビス・タンキットイワット氏／日本語編：



図1 専用Webサイト



図2 ハンズアウト



図3 会議パック



図4 eDCタワー1階に設置した巨大ポスター



図5 記録映像の1シーン



図6 基調講演（ヘレン・レオン氏）の様子

ていました。

本会議では、CDIOに関わる知見の共有と新規参加者への研修プログラムの他に、新規加盟大学のプレゼンテーションも行われました。今回は、フィリピンのセブ工科大学とカンボジアの王立プノンペン大学が、CDIOイニシアチブへの加盟を表明する説得力のあるプレゼンテーションを行いました。CDIO協議会は2024年9月にシンガポールで、これら2大学をCDIOイニシアチブの新たなメンバーとして正式に承認しています。

会議バックには、CDIO野球帽、SDGs（持続可能な開発目標）対応のリネン製会議用バッグ、米バイオマス製ペン、コルク製CDIOコースター、そしてDIY箸といったアイテムが含まれ、参加者から好評を博しました。また、学生の参加したアイス舞踊とよさこい踊り、そして海外出張先の平山教授とオンラインで繋げたデジタルアートパフォーマンスなどの文化芸術体験も、特に海外からの参加者にとっての異文化体験や本学らしい現代的なデジタルアートの可能性を感じさせるものとなりました。

4. おわりに

本会議は、そのプログラム内容もさることながら、運営自体も注目されました。それは、職員たちのホスピタリティの高さと、会議準備や当日運営の中にも多くの学生が関与していたことによります。伝統舞踊などのエンターテイナーとして学生が参画した会議はCDIOでも多く見られましたが、受付・案内に学生が関与したり、会議を盛り立てる多くの物を学生が制作したり、学生撮影班が活躍した事例は記憶になく、会議の準備と運営を通じてCDIOの体験教育を行う本学の取り組みは驚きを持って受け入れられました。準備から運営まで、携わった教職員と学生にとっては大変ではありましたが、貴重な体験となったと感じています。

今後も、FDの一環として、本学からより多くの教員がCDIOの会議に参加され、教育実践に活用されることを期待するとともに、本学構成員の皆様のご協力に感謝して結びたいと思います。

写真提供：国際交流留学生支援課、斎藤一教授、島田英二教授

矢島邦昭氏)、「CDIO統合カリキュラムによる教育における持続可能性」(シン・モー・チー氏)、「キャップストーンデザインプロジェクトを通じた産業能力の向上」に関する円卓会議、SRM科学技術大学のラジーブ・スクマラン氏とクリストゥ・ラージ氏による「工学教育のためのICTツール」などが開催されました。また、本学教員を含むパネリストによる「ICTの有無にかかわらず学生をやる気にさせる」と題したパネルディスカッションも行われ、多角的な議論の場が提供されました。

ポスターセッションでは、その大半が本学教員の取り組みの発表となりました。これらのプロジェクトの多くは、「非工学系プログラムへのCDIOの創造的な適応」を示しており、本学の教育実践がCDIOを工学教育のフレームワークから高等教育のフレームワークへと進化させる具体的なモデルケースとなっ



図7 CDIO101セッションの様子

FD研修会実施報告

FD委員会主催分

情報メディア学部 情報メディア学科
准教授 広奥 暢

1. 新任教員研修

日時：2024年4月8日 15時より

3名の新任教員が着任されました。所属学科からメンターを配置していただき、FD委員を交えて座談会形式で研修を実施しました。

2. FD研修会01

日時：2024年12月26日 16：15～17：45

講義ビデオの作成と利用についての研修を実施しました。

3. FD研修（生成系AI勉強会2）

日時：2025年3月10日 14：35～16：05

通常のFD研修会とは別枠で、前年度から通算2回目として生成AIに関する勉強会を開催し、活発な意見交換が行われました。

4. FD研修会02

日時：2025年3月26日 10：40～12：00

LMSの評定機能の利用について説明があり、この機能に限らずLMS利用について活発な質疑応答が行われました。

当日出席できなかった教員に視聴してもらえよう、以上3件についてビデオを作成し学内で共有しています。

学生相談室主催分

経営情報学部 システム情報学科
教授 五浦 哲也

1. はじめに

2024年度FD委員会の共催として企画・実施しました教職課程に関する研修会、学生相談室主催の講演につきまして、以下にご報告します。

2. 教職課程研修会

演題：「高等学校におけるICT教育の現状と課題および先進的なICT教育の取組」

講師：

北海道教育庁ICT教育推進局

ICT教育推進課ICT教育指導係 係長

長森 久志 氏

北海道教育庁ICT教育推進局

ICT教育推進課 指導主事

福士 公一朗 氏

北海道教育庁学校教育局

教職員育成課人材育成・教育研究所整備推進係
主任指導主事

石垣 友和 氏

日時：2024年8月29日（木）13：00～14：30

場所：本学118教室

内容：

学生が教員として成長、活躍していくためには、「養成段階」にある大学と教員の「採用」及び入職後に教員としてのキャリアステージに即して絶えず資質能力の向上を目指す「研修」を円滑に推進して



いくことが求められている。そのためには、大学においても北海道が求める教員像や教員育成指標の内容について理解していることは重要である。GIGAスクール構想に向け、教育現場では「個別最適な学び」「協働的な学び」「校務DX」へのICT活用が取り組まれている。北海道の道立高校及び特別支援学校高等部はBYODであることや「情報Ⅰ」「情報Ⅱ」のモデルカリキュラムが示されるとともに全国における「情報Ⅱ」の開設状況が示された。「情報Ⅰ」における先進的な取組事例として「モデル化とシミュレーション、線形計画法」やリーディングDXスクール・生成AIパイロット校についての紹介があった。

3. 学生相談室研修会

演題：「大学における自殺問題の理解と予防 ～教職員にできること～」

講師：

札幌医科大学 保健管理センター/神経精神医学講座

津山 雄亮 氏

日時：2025年3月19日（水）13：00～14：40

場所：本学松尾記念講堂

内容：

日本の年代別死因や自殺者数の推移、先進国（G7）の性別自殺率から自殺問題の現状についてデータに基づき現状と課題が示された。自殺問題において、6つのリスク因子や自殺問題に精神の病気が大きく関与していると考えられている。心理については、こころの視野狭窄といった状態があり、死にたい（ほど辛い）ということは辛くなければ生きたいということであることを理解していることが重要である。自殺の対人関係理論（joiner,2005）では、所属感の減弱と負担感の知覚が重なり自殺願望が生じ、自殺潜在能力が加わると致死的もしくは重篤な自殺企図に繋がることを示している。大学においては、自殺リスク因子や心理への理解に加え、自傷行為と自殺の関連や自殺に関する誤った世間のイメージ、自死による遺族の影響などを知り、正しい

理解に基づき自殺予防に取り組むことが重要である。大学においては教職員が、気付き、声掛け、つなぎ、問題の解決、フォローアップを行っていくことが大切である。



2024年度SD活動報告

SD委員会 委員長 瀧澤 浩基

2024年度（令和6年度）のSD活動として、学内で開催したSD研修会と、学外の研修会への参加状況等について、以下に報告します。

1. 学内でのSD研修会の開催（教職員対象）

教職員を対象として以下のSD研修会を開催しました。

(1) eラーニング「情報セキュリティ理解度チェックテスト」

- 実施期間：2024年5月1日（水）～5月30日（木）
- 実施方法：NPO日本ネットワークセキュリティ協会のサイトにあるeラーニングを利用
- 内容：1回25問の4択問題で、90点以上を合格。回答後に不正解の問題の解説を見て理解を深めた。

(2) 講演会「大学における自殺問題の理解と予防～教職員にできること～」

- 日時：2025年3月19日（水）13：00～14：40
- 内容：前半は本学の学生相談室の報告会、後半に講演会を実施した。講演会では、自殺問題の現状について統計的な資料を説明していただいた後、自殺に至る流れ、考え方、対応などの事例を交えて意見交換を行った。
- 講師：津山 雄亮 氏（札幌医科大学 保健管理センター相談室）
- 備考：学生相談室主催、SD委員会共催

2. 学内でのSD研修会の開催（事務職員対象）

事務職員を対象として「教えることが最大の勉強」のコンセプトで、以下の研修会を行いました。

(1) 研修会「CDIOにおける英会話基礎講座」

- 日時：2024年7月25日（木）16：15～17：45
- 内容：9月5日（木）～7日（土）に実施したCDIOアジア地域会議に向けて、海外からのお客様対応、おもてなしの事前学習として基礎的な英会話や翻訳アプリの活用方法を学習した。
- 講師：陳 楽兵、小田島 敬太（国際交流・留学生支援課）

(2) 研修会「ワークフローシステムの導入と利用手順について」

- 日時：2024年10月10日（木）16：15～17：45
- 内容：ペーパーレスや業務効率化、決裁時間の短縮、タスク可視化を行うためのワークフローシステムの利用手順等の説明を行った。
- 発表者：田村 亮太（情報センター事務室）、長坂 綾子、疋田瑞季（総務課）

(3) 報告会「研修報告会」

- 日時：2025年2月14日（金）10：00～12：00
- 内容：大学の実務に係る学校教育法や大学設置基準などの法令、省令について、また設置基準を実務にどのように活かせるのか説明を行った。日本私立大学協会北海道支部が実施した初任者研修会の参加報告を行った。
- 発表者：波佐尾 隆徳、疋田 瑞季（総務課）、天野 龍誠（会計課）、福岡 末緒（通信教育部事務部）

(4) 研修会「知ってもらいたい会計課・図書館」

- 日時：2025年2月19日（水）10：00～12：00
- 内容：会計課は外部資金、学費管理や経常費補助金に関する説明、グループワーク形式で勘定科目の仕訳を行った。図書館は目録作成やレファレンス、ガイダンスなどの業務内容について詳しく説明を行った。
- 発表者：佐藤 真美子、高屋敷 舞（会計課）、布川 葉月（図書館事務室）



3. 学外の研修会への参加

次の階層別研修会について、7名が参加した（eDCグループ全体で対象職員が参加）。

階層	新入職員	2級（主任職）	3級（係長職）
対象者	疋田 瑞季、 天野 龍誠、 福岡 美緒	田村 亮太、 廣田 隆一、 八重原 史貴	荒木 俊介
実施日時	10月7日(月) ～8日(火)	11月15日(金)	11月21日(木) ～22日(金)
内容	正職員として自覚、社会人としての振る舞い、学園に対する理解等	仕事に対するプライド、自身の視座・視野・視点を問い直す等	係長職に求められる行動の理解、職場チームをまとめる方法等
講師	専門学校 事業本部	(株)ビジネス コンサルタント	(株)ビジネス コンサルタント

その他にも、事務職員は日本私立大学協会北海道支部、私立大学通信教育協会主催の研修会や各種オンライン研修に参加しました。

FD・SD活動 行事实績(2024年度)

日 程	行 事
4月8日(月)	新入教員対象研修会
5月1日(水)～5月30日(木)	情報セキュリティ理解度チェックテスト実施
5月15日(水)～7月31日(水)	前期終了科目の授業評価アンケートの実施
7月25日(木)	SD研修会「CDIOにおける英会話基礎講座」
8月29日(木)	教職FD研修会(共催)「高等学校におけるICT教育の現状と課題および先進的なICT教育の取組～高大接続の視点から～」
8月15日(木)～8月24日(土)	前期 夏期集中授業 授業評価アンケートの実施
9月5日(木)～7日(土)	2024 CDIO Asian Regional Meeting
10月10日(木)	SD研修会「ワークフローシステムの導入と利用手順について」
10月28日(月)～1月21日(火)	後期終了科目の授業評価アンケートの実施
12月26日(木)	FD研修会「講義ビデオの作成と利用」
1月30日(木)	カリキュラム・アドバイザリーボード会議
2月10日(月)～2月15日(土)	後期冬期集中授業 授業評価アンケートの実施
2月14日(金)	SD研修・報告会「研修会参加報告会」
2月19日(水)	SD研修会「知ってもらいたい会計課」、「知ってもらいたい図書館」
3月6日(木)	2024年度北海道情報大学FD・SD フォーラム開催
3月10日(月)	FD研修会「生成系AI勉強会2」
3月19日(水)	学生相談室報告会・研修会(共催)
3月26日(水)	FD研修会「講義ビデオの作成と利用」

FD委員会の活動実績(2024年度)

委員会	月例ミーティング等日程
FD委員会	5/1(水)、5/23(木)、7/19(金)、9/20(金)、11/7(木)、3/17(月)

あ と が き

皆さん、QC活動という言葉をご存知ですか？ 現場の従業員が自主的に取り組む品質管理（Quality Control）の考え方で、トヨタ自動車が1960年代に導入した「カイゼン」が有名です。古臭い手法かも知れませんが、①目標の明確化、②正確な現状把握、③徹底的な見える化などは、現代のビジネスやFD/SDにも通じます。温故知新。先人の知恵を取り入れて、私たち教職員がモチベーションの維持や業務の改善が図られたら良いですね。

経営情報学部 先端経営学科 教授 藤本 直樹